

さいほうじていえん
西方寺庭園 説明資料

- | | |
|----------|----------------|
| 1 名 称 | 西方寺庭園 |
| 2 員 数 | 一式 (1, 162㎡) |
| 3 所在の場所 | 若桜町306 |
| 4 所 有 者 | 宗教法人西方寺 |
| 5 文化財の種別 | 史跡名勝天然記念物 (名勝) |
| 6 指定基準 | 名勝 1公園、庭園 |
| 7 説 明 | |

<由緒と来歴>

若桜町若桜字浦町に位置する不遠山西方寺は、浄土宗西山派の禅林寺の末寺である。寺伝によれば開基は俊空幸喜上人で、天文年間(1532~1554)には釈迦・阿弥陀の二尊を祀って寿命院二尊寺と称し、矢部山城守の祈願所として天台・真言・律・浄土の四宗を兼学していた。矢部氏は鎌倉時代初期に鎌倉から入部し若桜郷を本拠とした国衆で、鶴尾山に鬼ヶ城(若桜城)を築いたと伝える。その後、天正9年(1581)に羽柴(豊臣)秀吉の物見として鬼ヶ城に入った木下平太夫重堅(重賢・備中守)は、播州網干西方寺空伯李珍上人を二世住持として招聘し、祈願所とした。季珍上人は寺領の寄進を受けて二尊院を西方寺に改称し、堂宇を整備した。なお、現在も境内には木下備中守とその家臣団の墓と伝える五輪塔群がある。藩政時代には藩主池田家の帰依を得て御目見得・直触の寺格を与えられ、寺領は十石で境内は御免地とされた。なお、境内には大和柿があり、その初年りの柿を毎年藩主に献上していたことが寺蔵の古文書などに記されている。

西方寺は、明治7年(1874)8月および明治18年(1885)の二度にわたる若桜宿大火で類焼した。大火後の明治20年(1887)に25世住持の章空運文上人は「不遠山西方精舎表裏眺望真景之図」(以下、「真景図」と記す)を描かせ、往時の寺観を偲んでいる。ここに描かれる本堂・庫裏その他の建造物は焼失以前の姿を描いたものとみられ、屋内では茶の湯など文化的な集いが催されていたことを窺わせる。

その後、この真景図に対応するように本堂が明治33年(1900)に再建され、鐘撞堂・庫裏・山門なども整備されて現在に至っている。なお、「真景図」に描かれている庭園の姿を現況と比較すると、庭園の外周部に設けられた塀や園池に架けられた橋の構造・意匠、植栽の種類や形姿、飛石の配置などにおいて若干の相違点を確認されるが、園池の形状や護岸石の配置は現在もほぼ踏襲されているとみられる。

<庭園の構成と意匠>

現在の境内は約874坪で、本堂・庫裏がほぼ西面して南北に並ぶ。庭園は庫裏の背後(東側)に位置する池庭である。庭園の外周には玉石を用いた石垣が腰高で築かれ、その上部

をスギの生垣としている。

園池は南北 30m 以上に及び、岬や入江によって変化に富んだ形状を持つ。園池の周囲には小さな築山があるがほぼ平坦地で、刈り込み仕立てのサツキ・ツツジ類、スギやヒノキの針葉樹、ヤマモミジの高木をはじめ、竹林や水生植物が彩りを添え、石灯笼など石造物が景を引き締めている。園池には、敷地南側を流れる「カワ」と呼ばれる水路から水が引き込まれ、20m 以上の長さの流れ（導水路）がゆるやかに屈曲して小さな滝となり、園池北西部から西に向かって矩折れする排水路から流れ出る。園池中央北寄りには中島があり、2つの橋が架けられている。

庫裏（書院）から鑑賞すると、園池の背後には雄大な山並みを望むことができる。これがこの庭園の特徴の一つであり、「真景図」にもこれらの山並みが存在感を持って描かれている。しかし、一方でこの庭園には飛石や園路がめぐらされていることから、園内を逍遥する庭園でもある。縁先から沓脱石を介して庭に降り立つと、飛石を伝って石橋を渡り、中島を経て対岸に導かれる。そこには、現在は失われているが「真景図」によると宝形造の小さな建物があり、現在その基礎の一部が残されている。この建物の性格は未詳であるが、園池の西側に腰掛が描かれていることから、茶室であったと推定される。

園池や導水路の護岸、飛石、景石には主として八東川から産出される安山岩が用いられているが、園路の分岐点に据えられる踏分石には板状安山岩の巨石を、石橋には花崗岩の切石を、飛石の諸処には赤色チャートを、灯笼には緑色片岩を用いるなど、場所に応じて石の種類や形状・色彩を巧みに配している。これらの多くは明治火災後の復興で整備されたものとみられるが、飛石の一部には火で焼けたと思われる痕跡があり、明治の火災以前のもので残されている可能性がある。

<本庭園の文化財的価値>

以上のように、西方寺は藩政時代には藩主池田家の帰依を得た若桜を代表する古刹であり、庭園の構成と意匠は巧みで優れた芸術的・歴史的価値を有していることから、鳥取県名勝に指定するものである。

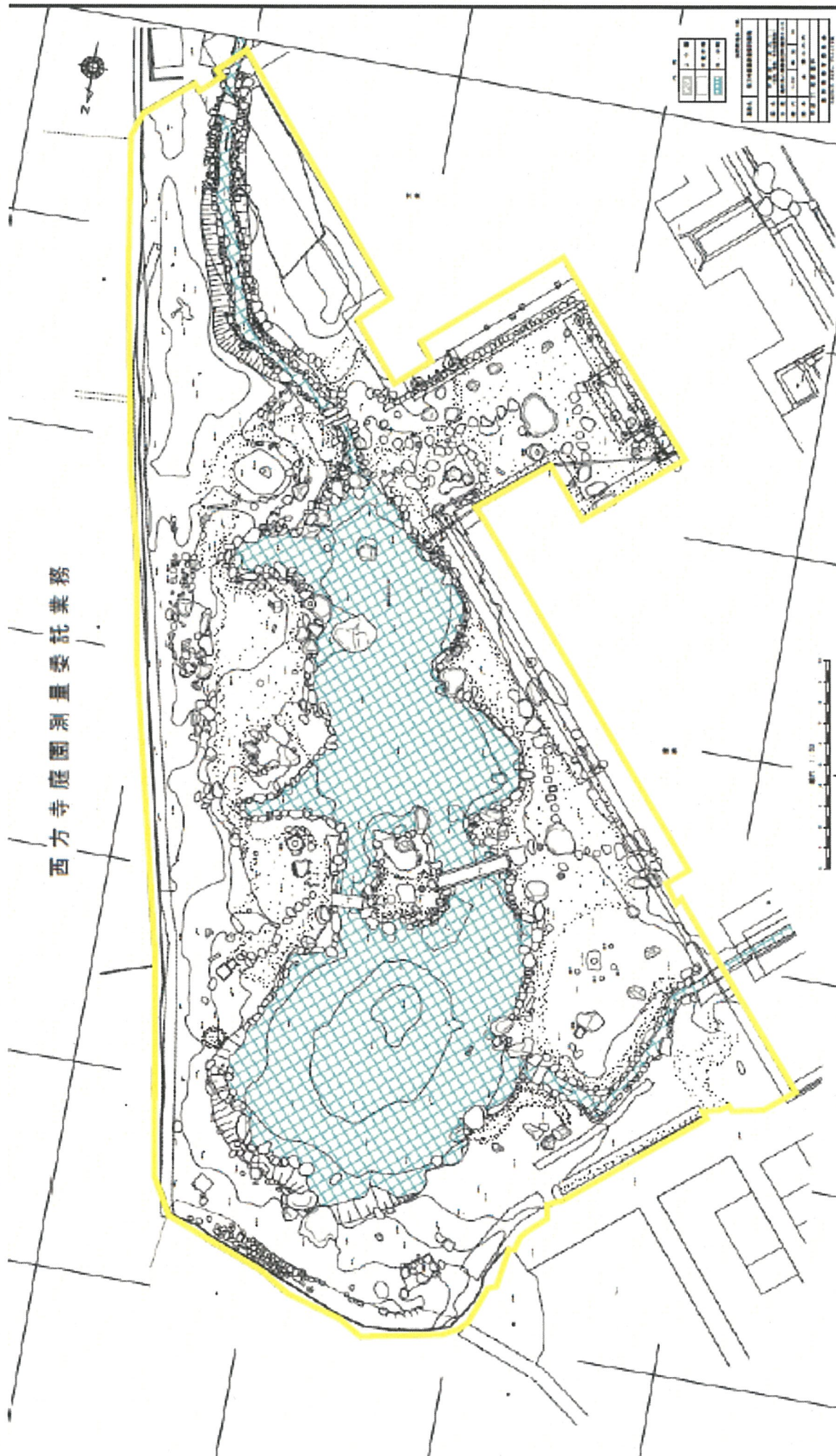
なお、現在、庭園は所有者によって適切に管理され、繁茂した植栽の整理などが行われている。しかしながら、本庭園は明治期に火災を受けたこともあり、景石の一部には熱によると思われる破損が見られ、園地護岸に若干の損傷が見受けられるほか、縁先手水鉢など後補された庭園構成要素がある。今後の保存整備においては、発掘調査を含めた学術的調査の成果を踏まえ、計画的に取り組む必要がある。

【参考文献】

2001『鳥取県の地名』日本歴史地名大系 32 巻 平凡社
鳥取県若桜町編 1983『若桜町誌』



西方寺庭園測量委託業務



1 名 称 革工芸

2 保 持 者

(1) 氏 名 本池 秀夫

(2) 生年月日 1951年6月13日生まれ

(3) 住 所 米子市大篠津町

(4) 略 歴

1951 鳥取県西伯郡大篠津村（現米子市大篠津町）に生まれる

1971 大学在学中に『アトリエMOTO'S』を主宰

1973 渡欧。旅先のイタリアでジュゼッペ・カッペの磁器人形に衝撃を受け、帰国後、人形作家を志す。

1975 渋谷パルコでの『ノーマン・ロックウェル展』に賛助出品

1976 西武デパートにて初の個展『本池秀夫の人形展』開催

1980 『アトリエMOTO'S』を米子へ移転

1987 『レザーアート日本展』（東急百貨店・東京、近鉄百貨店・大阪）
第1回米子工芸会展出品、以降毎年参加

1996 アジア工芸展（福岡市美術館・福岡、ふるさと会館アルピノ・佐賀）

1997 『革った人形と動物展』（仁摩サンドミュージアム・島根）

2002 第1回草加皮革大賞コンテスト（埼玉）審査員、特別作品展示、以降毎年参加
米子市文化奨励賞受賞

第17回国民文化祭・とっとり2002美術展（工芸部門）入選

2009 『本池秀夫—革の世界—』（米子市美術館、以降、山形、岡山、島根等で巡回展示）

3 基 準

(1) 無形文化財（工芸技術関係）

陶芸、染織、漆芸、金工その他の工芸技術のうち次の各号の一に該当するもの

①芸術上特に価値の高いもの

②工芸史上特に重要な地位を占めるもの

(2) 無形文化財の保持者（工芸技術関係）

①無形文化財に指定される工芸技術を高度に体得している者

②工芸技術を正しく体得し、かつ、これに精通している者

4 説 明

<革工芸>

日本の工芸のなかで革を用いたものは、武具・甲冑から衣装・装束、袋物・箱などの器物類まで多岐にわたっている。この革工芸には、毛を取り去った生革を叩いて成形したものに漆を塗って仕上げた漆皮、染料や煙によって色や文様を出した染革などといった技法がある。

遺存する遺物において古くは古墳時代の甲冑など、漆皮の技法によるもの、その漆塗の上に彩色したものがあり、日本における革工芸は少なくとも1,500年以上の歴史をもつことが知られている。

その後奈良時代から平安時代にかけて、正倉院や法隆寺の漆皮箱、唐招提寺の牛皮花鬘、正倉院や東大寺の染革・薫革など、技術的にも表現の上でも豊かで華麗な世界を現出する。

漆皮は古墳時代から続く技法であり、奈良時代に入り多くの漆皮箱が遺存することから、盛んにつくられたことが窺える。また、それは宮中のみならず、一般市民の生活にも浸透していたようである。し

かし平安時代、10世紀以降、木製素地、指物技術の高度化・多様化とともに漆皮箱制作・技術が衰退していったと考えられる。ただ、中世以降もこの技術は伝えられ、江戸中期にはベンガルから革素材を輸入し、漆塗・蒔絵されて盛んに海外に輸出されたことが知られている。

<保持者>

保持者として、米子市の本池秀夫氏が挙げられる。

本池氏は1951年米子市に生まれる。幼少の頃より、革を持つと気持ちが落ち着いたといい、日本大学文理学部体育学科在学中の1971年には、独学により自身のアトリエをもち、バックや靴、アクセサリーといった革を素材として制作と販売をはじめている。その後訪問したイタリアにおいて出会ったジュゼッペ・カッペの磁器人形、および幼少時、近所に住むアメリカ帰りの祖母に強く影響を受け、革による人形制作を志すようになった。

(1) 制作技術

人形は、実物の7分の1、ないしは10分の1で制作する。

材料はタンニンでなめした牛革を使用する。厚みは0.6mm、1.0mmなど数種類あり、制作する対象によって使い分ける。人形の身体については、木型に革を張り付け型をつけた後、木型を抜いて内部を空洞にするものと、樹脂に革を張り付けるものの2種類がある。衣類や帽子、靴といったものは厚紙で型をつくり、それを元に革を裁断する。型になじませて成形するという制作方法から、古墳時代から続く漆皮の系譜に位置づけることができる。

まず、顔などの形を彫り込んだ木型をツゲ、サクラ、ホウなどで作成する。これに水分で湿らせた革を巻き付けた後、指でなでつけ、顔の場合、歯科医療器具で目鼻など細かい表情を、ナイフで切り目を入れて髪の毛や皺などをつくる。

人形の身体全体はもちろんのこと、肌着などの下着から上着までの衣服や帽子・靴といった衣装、椅子や机など周辺の品々についても一部金属製品を使うが、ほぼすべて型を用いて、各々に応じた厚みの牛革によりつくっている。衣服や帽子、靴等は、制作技法・手順とも通常の製品と同じように行われ、そのサイズのみが人形に合わせて小さいだけである。ただ単純に縮小しただけでは、全体に厚くなってしまうため、不自然にならないよう計算して制作するほか、革同士を縫製してつなぐ場合は接合部を斜めにカットするなど工夫している。また、作品はブラウン系のみで彩色される。

近年は、真にリアリズムに徹した原寸大の「革の動物」を制作している。6mを超えるキリンや4mのゾウ、ゴリラやライオン、犬など牛革のみを素材とし、これもブラウン系一色で統一されているが、動物それぞれの豊かな表情が作り出されている。

(2) 特徴と評価

自身の作品を「アーリーアメリカンの古きよき時代の人々の生活を描き続けた画家ノーマン・ロックウェル氏のノスタルジックな世界と、カッペ氏のリアリズムが同居した」(本池1998)ものとし、とくに老人と子供の情景をユーモラスを交えながら主題としている。その思いは「人生の機微を知った円熟と幼い純真が作り出す物語は尽きる事はありません。一体一体の人形にそれぞれ個性があり、それらが集まることでひとつの優しい世界ができるような気がします」という(本池2013)。

自らが修行し習得した革工芸を基に牛革の素材を見極め、独自に技法や制作道具に工夫を凝らす。革という素材の肌の質感や造形の可能性を広げつつ制作され、細部にまでこだわり独創のリアリズムを追求する。革製品の制作に裏付けられた高い技術による人形などの作品は、芸術上も非常に価値が高く、本池氏は鳥取県を代表する革工芸作家である。

また自らの工房に多くの職人を抱えるほか、大学等で講師を務めるなど後進の育成、技術の伝承にも大いに尽力している。

【参考文献】

金子賢治 1994 『革工芸』日本の美術 No. 342 至文堂

本池秀夫 1998 『革の人形 老人と子供』美術出版社

本池秀夫 2013 『本池秀夫 革の世界』(有)モトス

諸山正則 2013 「本池秀夫の革の人形とその時代」『本池秀夫 革の世界』(有)モトス



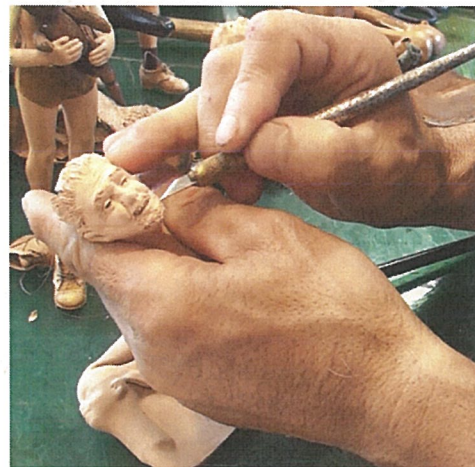
材料



切り出し



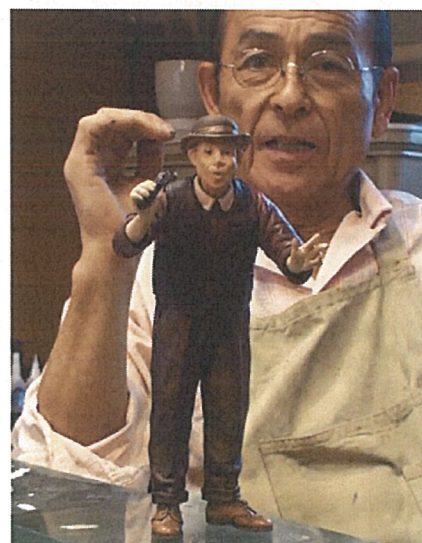
巻きつけ



成形



彩色



作品

たけのうちちょう
竹内町のオコニヤ 説明資料

- 1 名称 たけのうちちょう 竹内町のオコニヤ
- 2 所在の場所 境港市
- 3 種別 記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財
- 4 選択基準

1 風俗慣習のうち次の各号の一に該当し、重要なもの

(1) 由来、内容等において我が県民の基盤的な生活文化の特色を示すもので典型的なもの

5 説明

(1) オコナイの定義と分布

オコナイは、密教寺院の修正会の影響を受けた民間行事で、新春に地域と家々の安全と五穀豊穡、大漁満足を祈るものである。

西日本に広く分布しており、中でも滋賀県の湖北地方は分布密度の濃い地域として有名であるほか、滋賀県甲賀地方、島根県の出雲地方東部も多く分布している地域として注目されている。鳥取県では境港市のふくさだちょう福定町やせざき瀬崎地区（にゅうせんちょう入船町・あさひまち朝日町）でも行われていたというが、現在まで継続されているのは、竹内町だけである。（図1 オコナイ分布図）。

オコナイには、堂宇で行われる寺オコナイと、神社で行われる宮オコナイがある。また、霊験あらたかな社寺に対して周辺村落が順番に頭役として奉仕するかたちと、村落内の社寺に地元住民が頭屋として奉仕するというかたちに分類できる。いずれのオコナイも女人禁制、精進潔斎が求められた（写真1・2）。

(2) 竹内町のオコニヤ

竹内町では、この行事をオコニヤと呼んでいる。同町内の大同寺（曹洞宗）に15軒の草分け（本家）を中心とするモット（同族組織）がそれぞれ講中をつくり、輪番で大餅を作って奉納し、次の講中に引き渡す行事である。

寺オコナイの特徴として、大餅、牛玉、ハナノキ等を奉納すること、読経の間に牛玉の木で堂をたたき大声をあげること（乱声）、願文を読み込むことなどがあげられるが、現在の同町のオコニヤでは乱声は行われていない。

ア 行事の次第

現在における行事の式次第は以下の通りである。前日までの準備は竹内町会館で行われている（平成28年の例）。

1月5日 糯米を水に浸す。

1月7日 餅を搗いて大餅をつくる。

1月8日 大餅に墨で字を書き、松の割り木でからむ。牛玉をつくる。

1月9日 オコニヤ

大餅は、大祝餅2枚で1斗、薬師餅2枚で7.5キログラム。以下のように墨で書き入れる。大祝餅には、表「平成二十八年 南無薬師如来 正月九日」、裏「町内安全 国家安泰」。薬師餅には、

表「南無薬師如来」、裏はなし。大祝餅の上に薬師餅をのせて松の割り木で固定する。これを2組つくる。このほか、祝い重ね餅を7重、仏器の椀に小豆飯を盛って輪縄を載せたものを5膳、ウツギに護符を挿した牛玉、ハナノキを用意する。

オコニヤ当日は、午前9時に講元の家で講員が集まる。大餅、牛玉、ハナノキ、祝い重ね餅、小豆飯は仏壇の前に並べられる(写真3)。午前10時から、大同寺住職、正福寺(境港市中野町・曹洞宗)住職が招かれ法要が営まれる。般若心経から先祖回向と続き、今年の講元と講員の氏名を読み上げて、家内安全、健康祈願、消災吉祥を祈り、講元が焼香する(写真4)。祈願に五穀豊穡が含まれていないのは、竹内町の宅地化と関連するかもしれない。また読経は正福寺住職が中心になって行うが、これは大同寺が正福寺の管理下に置かれていた堂時代からの伝統ではないかと思われる。

講元での法要が終わると、講元の家から、大同寺住職を先頭にして行列を連れ、大同寺に行く(写真5)。大餅を柱に掛け、牛玉、ハナノキ、祝い重ね餅、小豆飯を仏壇の前に並べる。仏前に向かって左側に今年の講元と講員、右側に新講元と講員が座り、11時頃より法要が行われる(写真6)。法要を主宰的に行うのは正福寺住職であり、大同寺住職は後ろに座る。般若心経、大般若転読、消災妙吉祥陀羅尼、妙法蓮経観世音菩薩普門品第二十五の後半部分の普門品偈、大般若回向文、焼香と続く。大般若回向文の途中で、読み込みと称して、講元講員の氏名を読み込んで家内安全、交通安全、諸縁吉祥などを願う。

法要の後、次の講中に大餅を引き渡すと、旧講元と講員は竹内町会館に移動して会食する。〇〇ザシキなどの呼び方はなく、慰労会という。

新しく当番となった講元と講員は大餅を15に切り分けて各講元に届ける(写真7)。各講では、それをさらに切り分けて講員に配る。餅を配るときには、墨がついている部分の方がおかげが多いと信じられており、以前はなるべく大きく字を書いたが、最近は墨汁なので体に障るとの声もあって、字が小さくなる傾向にある。それでも新講元が餅を切る際には、白い餅はよくないといって、少しでも字が入るように切り分けている。

イ 祭祀組織

竹内町のオコニヤで特筆すべきは、村落の草分け15軒を講元とする講中が、輪番で祭祀を行っている点である。面谷家モット、渋山家モット、嵯峨里家モット、松下家モット、景山家モット、足立家モット、竹中家モット、福本家モット、根本家モット、小原家モット、小西家モット、東家モット、湯中家モット、森坂家モット、足穂家モットに分かれ、上記の順番通りに当番を務める(図2)。祭祀の中心となる講元は本家が務めることになっており、本家が転出、絶家したモットでは、ほかの家が本家の代わりに講元を務めている。

モットとは本家を中心にした同族組織である。同族組織をモットと呼ぶことは、伯耆地方の西部、島根県能義郡や仁多郡の一部、岡山県真庭市の一部においてみられるが、中でも弓浜半島は同族によって開拓された歴史をもち、その系譜関係が明確に意識されている。

(3) まとめ

鳥取県内で唯一オコナイ行事が伝承されている境港市は、全国的にみても色濃くオコナイ行事が分布する出雲地方東部から連続した範囲にある。出雲地方あるいは湖北地方との関連が推測され、オコナイ行事の分布やあり方を考える上で興味深い。また、竹内町のオコニャは、モットと呼ばれる同族組織が行事の担い手となり、現在まで続けている希有な事例である。一方、時代の変化により、行事の伝承に課題がみられるようになっており、廃絶した行事や隣県との比較を含め、早急に記録作成等の措置を講ずべきである。

【参考文献】

- 五来重「修正会・修二会と民俗」『講座・日本の民俗宗教2 仏教民俗学』弘文堂1980
余子公民館『竹ノ内伝承記』1985
『境港市史』境港市1988
長浜城歴史博物館『近江のオコナイ』1990
『滋賀県の祭礼行事』滋賀県教育委員会1995
長浜城歴史博物館『オコナイの源流をさぐる』2001
早川時夫「竹内町のおこない」『鳥取県の祭り・行事』鳥取県立博物館2006
中島誠一『川道のオコナイ』サンライズ出版2011
松江市史編集委員会『松江市史別編2 民俗』松江市2015

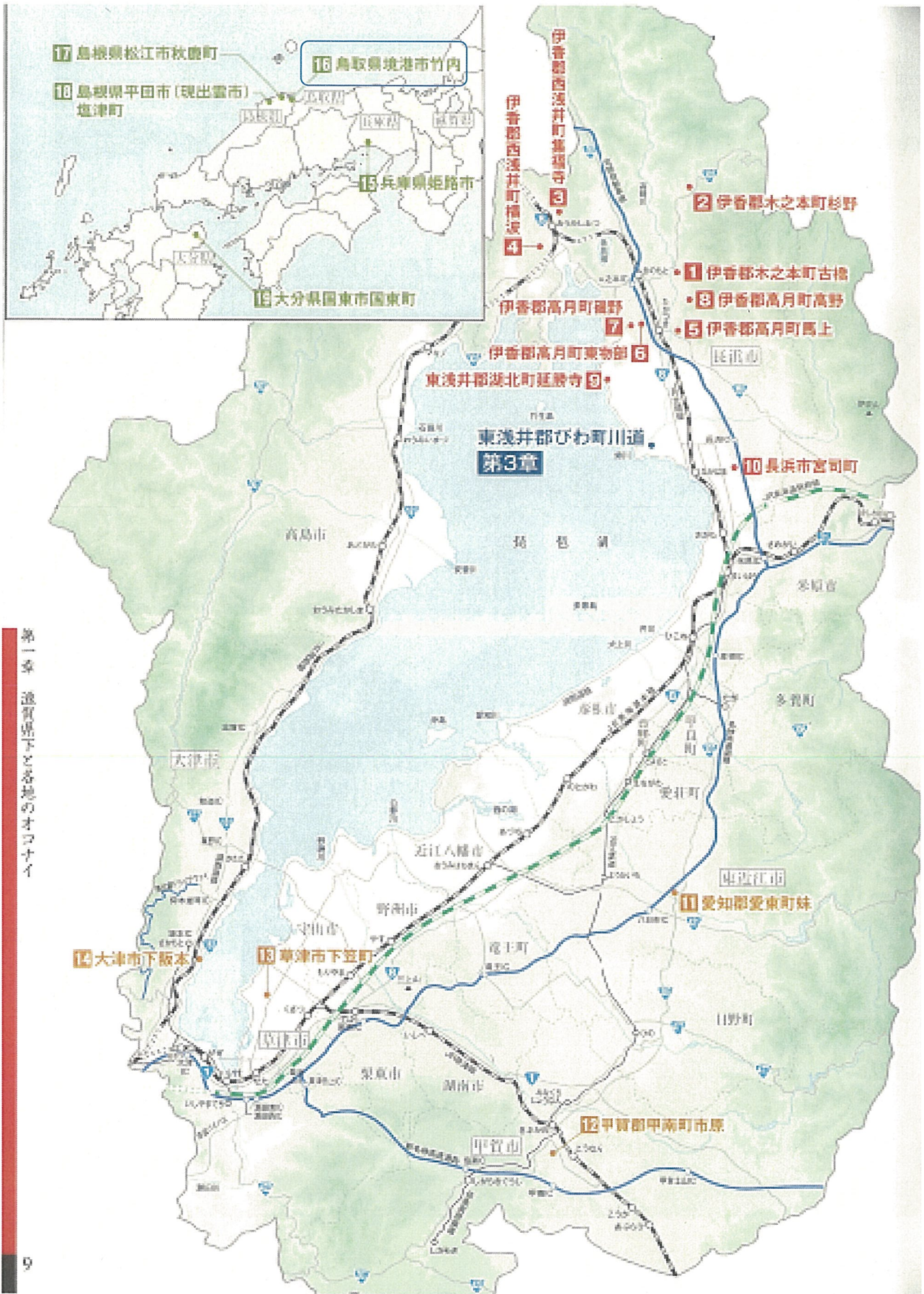


図1 オコナイの分布 (中島誠一『川道のオコナイ』p 9より)



写真1 滋賀県甲賀市市原のオコナイ（『近江のオコナイ』より）

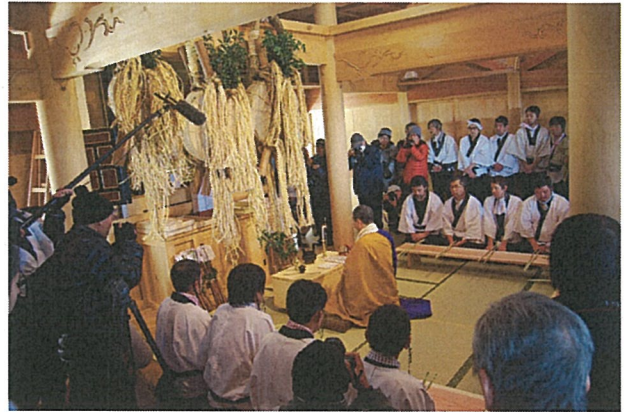


写真2 秋鹿大日堂御頭行事（松江市）



写真3 講元の仏壇に供えられた大餅



写真4 講元の家法要



写真5 大同寺への行列



写真6 大同寺の法要



写真7 大餅を切り分ける

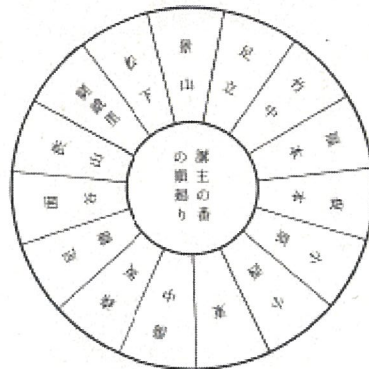


図2 講主の順番 竹内町薬師講保存会編『竹内町四百年史』S54より